29 秋のガイド研修会　　2017.11.14

中津川の山城「苗木城」と女城主の里「岩村」を訪ねました

今回は研修部の皆さんがしっかり下調べをし、事前にパンフレツトも配って勉強してマイクロバスで出発しました。そんな熱意に反してあいにくの空模様でしたが、和気あいあいと且つ思わぬハプニングもあるなど、楽しい研修会になりました。いただいた資料などから私なりの整理をしました。

苗木城跡の見学

苗木城の変遷と 10.500 石の苗木藩誕生

苗木城は鎌倉時代から東美濃の岩村遠山氏の支城として築かれたという。年代については諸説あるが天分年間(1532～1555)、岩村城主遠山景友の子直廉の築とも伝えられている。当時は戦乱の真っただ中にあり、苗木城は美濃に侵入してくる信濃の小笠原氏に備えるために築かれたといわれる。この地は木曽路の入り口で、且つ美濃から飛騨へ通ずる要衝だった。

小笠原氏が衰え武田信玄が信濃を制すると、美濃を併合しようとする織田信長との両雄の間にあって、苗木城主遠山勘太郎は信長の妹を妻に迎え、織田氏の勢力下に入った。さらに、二人の間に生まれた姫は信長の養女となり、武田勝頼のもとへ嫁いでいる。

元亀三年(1572)信玄は秋山晴近を美濃に侵入させた、岩村遠山氏はやむなく軍門に下るが、苗木遠山氏は信長方にあってよく戦い、主城は落ちたが苗木城を含む遠山十八子城は、ほとんどが城を守り抜いたと伝えられている。しかし、天正二年に武田勝頼に攻め落とされ、翌天正三年織田信忠が岩村を攻めて秋山晴近を討つと、再びこれを取り戻すなど苗木遠山氏は苦難を強いられている。

信長が本能寺に倒れると、苗木遠山氏は家康にしたがった。しかし、家康が秀吉に臣従したので、遠山氏は苗木城を失い城は森長可のものとなった。城を追われて家康のもとにいた遠山友忠・友政父子は、関ケ原の戦いのとき苗木城を攻めとることができた。そして、合戦の後家康は遠山父子に苗木一万五百石余を与えた。

そんな苗木藩にはお寺がない。明治３年～４年にかけて強引な廃仏毀釈が徹底的に行われた。藩主遠山氏の菩提寺も破壊された。このために、今でも旧苗木藩領にはお寺がない、だからお盆もこないという。

赤壁城と竜神伝説

苗木城は赤壁城の別名があり、城の壁は白い漆喰ではなく赤い壁がむき出しになっていたという。城の天守台は巨岩の上に三層の天守が建てられ、壁は白壁であった。ところが、一夜明けると漆喰がはげ落ちて赤い土がむきだしになっていた。何度塗りなおしても朝になると同じであった。殿様はだれがこんなことをするのか寝ずに見張りをした、すると夜空が掻き曇って風雨が出てきたかとおもうと、恐ろしい大きな竜が表れて熱い息を吐きかけると、たちまち壁が落ちてしまったという。

白い色をきらう木曽川の竜神がはぎ取ってしまうというお話が、中日新聞の『ふるさとの童話』という記事に紹介された。しかし、実際のところは漆喰仕上げをするだけの経費が捻出できなかったのが本当らしい。というのも、幕末期に一万石で城持ちだったのは苗木藩しかなかった。

抜群の眺望を誇る天守台跡

中津川インターを出て城山大橋を渡り右折すると、苗木遠山資料館がある。今回はパスして城跡へ登るためくねくね道を上り駐車場まで直行した。カーブを曲がるたびにマイクロバスの泥除けが地面をこすり、ガガーと音を立てるのが気になった。

バスを降りて歩き出すと辺りは紅葉がきれいだ。時間の関係で先に天守のあった展望台まで登って、それからゆっくり写真を撮ってくださいと研修部長から注意があった。しかし、そうは言ってもチャンスは逃さないようにシャッターを押しながら進んだ。最初のビューポイントは天守台跡がガスの立ち込める中に、岩山の上に浮かび上がりまさに天空のお城を思わせるものだった。この景色はお天気が良ければ見られないものなので、雨模様のお天気に感謝しなくてはいけない。

最初に現れた石垣は「風吹き門」で、夏は涼しい風が吹くのでこの名前が付けられたという。この名前の付け方はちょっと珍しいと思った。しかし、冬には雪が横に降る厳しい地形なのだ。この門を抜けると平地が広がり三の丸で「大矢倉」があり、右手には「大門」があってその東は崖だ。ここを通り抜けると「台所門」があって二の丸で、ここは領主遠山家の住居や家臣が集まる部屋がありました。ここからさらに坂下門跡、綿蔵門跡と折れ曲がりながら登っていくと、「千石井戸」があります。千人井戸ともいわれ、千人の兵を潤して枯れることがなかったという。こんな高い場所でほんとに水が豊富だったのだろうか。苗木城は本丸・二の丸・三の丸など合わせて、約一丁歩の面積がある、小さいながらも城としての機能を余すところなく満たした、伝統の名城であった。天守復興の計画もあったが、旧藩主遠山氏の子孫の意向もあって復元されなかったという。15 分ほどで天守台跡の 432m の展望台に到着し、３６０度に広がる素晴らしい眺望に思わず息をのんだ。木曽川の流れ、中津川の街がガスの中に浮かび広がる様は何とも言いようがない。晴れていれば遠くに恵那山の雄姿をはじめ、眼前に大パノラマが迫ることだろう。そして、美しい色合いの紅葉が一段と映えることだろうと思った。

天守台跡の展望台

木曽川の流れと遠景

苗木城は石垣の博物館

苗木城は岩山にそびえる天空の城であるだけではなく、石垣の積み方の種類がいろいろあることでも知られている。いただいたパンフレツトによれば６種類もの石垣があり、城づくりの歴史が見て取れるという。その種類とは…

Ａタイプ　野面石乱層積み...　３か所

大きさの違う自然石を積み上げて造られています。技術的には初期の石積み方法で、戦国時代によく使われた技法です。

Ｂタイプ　打ち込み石乱層積み...　４か所

積石の形が不規則で、他のタイプの石垣と比べて大きい積石を使用しています。積石の表

面を平らにして積み上げてあります。
Cタイプ　打ち込み石整層積み...　２か所
布目状に積まれており、積石の形がほぼ長方形になっています。積石の間に隙間があり、高さが２m以内で勾配が急なことが特徴です。
Dタイプ　切り込み石整層積み...　９か所
石の形を調整して積み上げて造られています。罪石の面はあまり加工されておらず、他のタイプの石垣と比べて積石が小さいものを使用しています。このタイプが最も多くて９か所あります。
Eタイプ　ノミ切り加工整合積み...　１か所
ノミを使って積石をきれいに加工して、隙間がないようにピッタリ積み上げています。罪石の各辺が
直線的に加工されているのが特徴です。
Fタイプ　谷積み技法を用いた石垣...　１か所
平石の隅を立てて積んでおり、落積みとも言われています。この積み方は昭和に至るまで道路工事などでも使われていました。
このようにDタイプの切込み石整層積みが特に多く使われており、特定の場所ではなくお城の全体に見られます。つまりは、ある時期に集中して造られたか整備がなされたと考えられます。
天守台跡から三の丸を見下ろすと、ガスの中に浮かぶ石垣が二段三段に積まれた様がまるでマチュピチュを思わせる。眼下に広がる木曽川の流れや中津川の街など素晴らしい眺めを満喫して思ったのは、二の丸あたりとか本丸などで絶景を見ながらおいしいコーヒーなどが飲めたら最高ではないか。あるいは秋の紅葉を愛でながら団子をほうばりたいものだ。中津川の観光協会は、そんな企画を実現してほしい…そんなことを思ったのは私だけではないだろう。

岩村城下町

城下町で発見したカステラの味

明知鉄道岩村駅から岩村城跡までをつなぐ 1.3km の古い街並み周辺には、当時の面影を残す商家や旧家がたたずみ国の重要伝統的建造物保存地区に選定されています。国道 257 号沿いの小さな食堂を貸し切りにしてランチをすませ、岩村の街を散策しました。以前訪れたことがあり、女城主の酒屋は覚えています。女城主の看板が目に付く店先には杉玉が吊り下がり、その下には大きな亀が置かれています。私はお酒をほとんど口にしないのであまり興味はないのですが、みなさんと一緒に店に入って甘酒を試飲しました。でもここの女性の店員さんはちょっとぶっきらぼうな態度で、客に買う気を起こさせるような対応ではありませんでした。ここは天明７年(1787)の創業と伝わる岩村醸造で、岐阜県産の酒米と４００

年前に掘られた井戸の天然水を使っているとか。品評会でも高い評価を得ている「女城主」はよく知られています。歴史のある街には必ず酒蔵があり、街の発展とともにその歩みがあります。

次にその向かいにある和菓子屋さん「松浦軒本店」に入り、カステラを試食しました。というのも会員の矢島さんが盛んに勧めてくれたからです。ここのカステラはとてもおいしいのはもちろん、その作り方が昔の作り方をかたくなに守っているというのです。パンフレットによると和菓子を生業に寛政８年(1789)から続く老舗。江戸時代にポルトガルから伝わった製法を変えることなく、カステラを作り続けてきました。すり鉢や石臼を使って生地を作り、小釜で一本ずつ焼き上げています。古くからのレシピのまま、ハチミツを使っているのが特徴という。試食したカステラの味は良かったので、お土産にカステラと岐阜の山間部まで来たので栗きんとんを買いました。

いただいたパンフレットには「昔のカステラを岐阜で発見」と見出しが躍り、元祖カステラは、210 余年を経てなお頑固に守られていたのです。しかし、なぜ長崎に伝わったカステラが岐阜の片田舎にその味を今に伝えているのか? 小学館発行のサライが取材をした内容が載っていました。そこにはカステラとはどんなものなのか、に始まり今日に至る経緯が書かれていました。それによると…

① カステラとはポルトガル語で「ボォン・デ・ロ」と言い、丸い形をしたパンの一種。

② 「ボォン・デ・ロ」は日本国内で食べられるところはなく、長崎の医師・中西啓氏はポルトガルまでカステラのルーツを調べに行ったことを知る。

③ 中西啓氏の話から、岩村の「松浦軒本店」で作られているのが本当のカステラの原型と聞く。

④ 何故、岩村に残っているのか? 「松浦軒本店」に聞くと

寛政８年(1789)岩村藩の御殿医が長崎でオランダ人よりその製法を習い、帰国して我が家に伝えたのがこのカステラです。製法は当時と一切変えていません。現代風に直してしまうと、松浦軒のカステラの意味がなくなってしまいますから……というものだった。

頑固なまでに守り続けた昔の味は、その歴史とともに多くのファンを作り繁盛しているようで、とても喜ばしいことです。私自身岐阜の山奥にきて、カステラをお土産に買うとは想定外のことでした。

岩村城と女城主

三大山城の一つ岩村城

岩村の城下町からマイクロバスで岩村城跡へ移動しました。岩村城は大和高取城(奈良県)、備中松山城(岡山県)と並ぶ日本三大山城の一つに数えられる名城です。城は江戸諸藩の中で最も高い標高 717m に築かれ、高低差１８０ｍ の天然の峻嶮な地形を巧みに利用した、要害堅固な山城です。霧の湧きやすい気象までも城づくりに活かされており、別名「霧ケ城」とも呼ばれています。

文治元年(1185)源頼朝の家臣・加藤景廉によって築城され、激動の時代を経て明治維新まで７００年にわたり存続し、日本三大山城に選定されています。

岩村城内には 17 か所もの井戸があり、現在も枯れることなく水をたたえていると言います。そのため籠城の際に飲み水に困ることがありませんでした。中でも「霧ケ井」は城主専用の霊泉で、敵が攻め入った時に城内秘蔵の蛇の骨を、この井戸に投じるとたちまち霧が湧き出て城を覆いつくし、城を守ったといいます。ゆえに岩村城は別名「霧ケ城」と呼ばれています。

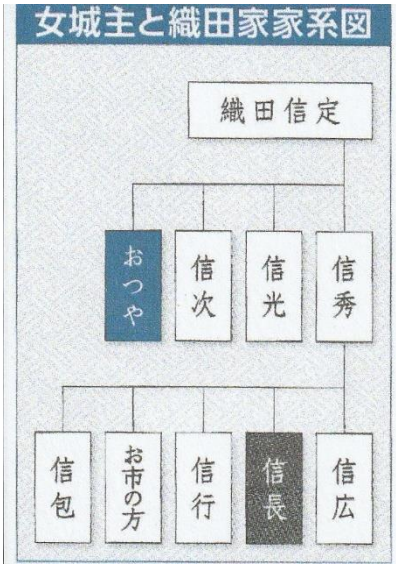
駐車場につくとそこは長屋門造りの建物にトイレがありました、そのすぐ先に石垣が見えます。これが南曲輪で、本丸防衛に重要な曲輪でした。曲輪というのは城の内外を土塁や石垣、掘りなどで区画した区域のことです。少し進むと岩村城の特徴ともいえる石垣の「六段壁」が現れます。もともとは段差のない高石垣でしたが、崩落を防ぐために各段には犬走りが設けられました。この城一番のビューポイントで石垣の美しさが際立っています。その先で石垣の積み方が３種類みられるという埋門を抜けると、本丸跡です。ここは平らな所があるものの、隅に昇竜の井戸がある以外は特別変わった様子はありません。お城についての説明板と石碑があるくらいで、隣のモミジが紅葉しているのが目を引きました。でも、モミジが多いわけでもなく、見晴らしがよいわけでもありません。雨も降り続いており周りを散策することもかないませんでした。

いただいたパンフレットを見るとその距離 800m、城下から歩いていくと初門、一の門、土岐門、追手門、にわか坂門を抜けると六段壁を見て、さらに長局門・埋門を抜けると、やっと本丸に到着するようです。しかし、パンフレットにもあるように、駐車場までは大型バスの通行ができるようになっており、訪れる人の多くは私たちのように車で石垣の見える駐車場を目指すに違いありません。

女城主おつやと水野家のかかわり

戦国時代末期、城主遠山景任が病死し、養子として迎えていた織田信長の五男御坊丸がまだ幼少であったため、その夫人おつや(信長の叔母)が実質的な城主として領地を治めていました。いわゆる女城主です、おつやは大変聡明で美しく領民に慕われていたといいます。

元亀３年(1572)武田信玄の 24 将の１人、秋山虎繁が侵攻してきました。おつやは自ら采配をふるい、信長の支援を待って籠城作戦に出ました。しかし、この時信長は長嶋の一揆などで前に進めずにいました。籠城は三か月にわたり、城内の食料も不足してきたころ、秋山虎繁からおつやを妻にすることを条件に無血開城を申し入れてきました。おつやは苦渋の末、城兵や領民の命を守るために敵将との結婚を決意し、開場しました。



その後の数年間、おつやは秋山虎繁とともに、城の普請や城下町の整備に努め平和な日々を過ごしました。しかし、御坊丸は信玄のもとへ人質として送られてしまい、岩村城も乗っ取られてしまいます。このことに信長は黙っておらず天正三年(1575)長篠の戦いに武田勝頼軍を破り、武田と織田の勢力が逆転し、信長の嫡男織田信忠が率いる織田軍が攻め入りました。この時も岩村城に半年に及び籠城しましたが、武田の援軍も望めず、信長からの条件をのみ開場しました。その条件とは、領民を守りおつやと虎繁の命を守るという約束でした。しかし、信長はこれを反故にして夫妻は磔刑に処されてしまいました。

この戦に緒川城主水野信元も織田方の一員として参戦していました、が、敵方に塩を送っていると佐久間信盛の告げ口により、信長の命を受けた家康により殺害されました。このことは自分の妻だった女の兄を討ったわけで、戦国の世とはいえ血縁にある者を討つことにためらいはなかったのでしょうか。それとも自分たちの仲間から抜けて、あえて織田方についたのだから当たり前と考えたのでしょうか。

このあと大正村に立ち寄りましたが、見学はせずにコーヒータイムを楽しみました。そして、帰りは小原村の四季桜を車窓から眺めながらバスの旅を楽しみました。